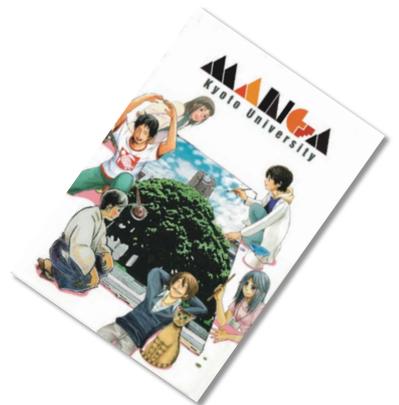
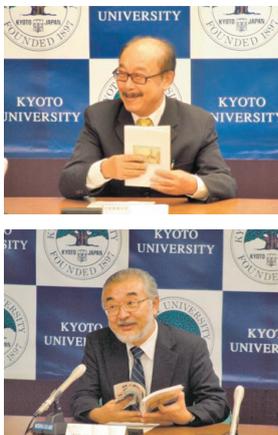




# 京大広報

No. 638

2008.10



京都大学を紹介するマンガ完成披露記者発表の様子  
—関連記事 本文2729ページ—

## 目次

<p>伝統を基礎とし革新と創造の魅力・活力・実力 ある京都大学を目指して 総長 松本 紘……2722</p> <p>〈大学の動き〉 松本 紘理事・副学長が第25代総長に就任 ……………2725 理事等が発令される……………2725 部局長の交替等……………2727 尾池総長が AEARU 総会・理事会を主宰 —中国科学技術大学50周年創立祝典出席、 上海交通大学表敬訪問—……………2728 全学教育シンポジウム「京都大学における教育の 現状と将来を考察する—第Ⅰ期から第Ⅱ期へ 向けて—」を開催……………2729 京都大学と京都精華大学との連携協力に関する 基本協定書の締結及びマンガ完成披露……………2729 博士学位授与式……………2730 全学寄附研究部門の設置……………2731</p> <p>〈部局の動き〉 「第15回JSPS拠点大学交流事業『都市環境』 日中合同会議」を開催……………2732 低温物質科学研究センター新研究棟落成式 を挙行……………2732 寄附講座の設置、更新……………2733</p> <p>〈寸言〉 大学の国際評価に触発されて 村上憲郎 ……2734</p>	<p>〈随想〉 ベネディクト・アンダーソンを追い掛けて 名誉教授 加藤 剛……2736</p> <p>〈洛書〉 京都の個人的な印象 大槻知忠……2737</p> <p>〈栄誉〉 山中伸弥物質—細胞統合システム拠点 iPS 細胞研究センター長が武田医学賞を受賞 ……………2738</p> <p>〈日誌〉……………2738</p> <p>〈話題〉 平成20年度京都大学新採用職員研修(後期)で 宇治キャンパスを見学……………2739</p> <p>〈計報〉……………2739</p> <p>〈公開講座〉 玉城嘉十郎教授記念公開学術講演会(第47回) ……………2740</p> <p>〈お知らせ〉 シンポジウム「京都大学サービス・イノベーション 国際シンポジウム」……………2741 2008年度秋の自然観察会のお知らせ……………2742 第12回京都大学国際シンポジウム「変化する人種 イメージ表象から考える」……………2743 無料法律相談のお知らせ……………2743</p> <p>〈隔地施設紹介〉 防災研究所附属地震予知研究センター— 上宝観測所……………2744</p>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

京都大学総務部広報課

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

## 伝統を基礎とし革新と創造の魅力・ 活力・実力ある京都大学を目指して

京都大学総長 松本 紘

平成20年10月1日をもって第25代京都大学総長に任命されました。その重責を果たすべく、意義ある大きな仕事に挑戦し、京都大学のために身を捧げるつもりでいます。

本日は、就任にあたって、日頃考えていることを元に、これからの京都大学の進むべき方向について私の基本的な考えを皆さんにお示ししたいと思います。

京都大学は創立以来、自由の学風のもと闊達な対話を重視し、京都の地において自主独立の精神を涵養し、高等教育と先端の学術研究を推進し、111年が過ぎました。京都大学は平成16年度から国立大学法人となり、法人化後は中期目標設定および評価基準の導入など、国立大学時代とは異なる新たな制度・環境変化への対応が求められています。

激動の変革期といえる現在、京都大学には、自由の学風を継承発展させつつ多角的な課題の解決に果敢に挑戦し、地球社会の調和ある共存に貢献することが期待されています。

教育基本法第七条に「大学は、学術の中心として、高い教養と専門知識を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、その成果を広く社会に提供することによって、社会の発展に寄与するものとする」と明記されています。この基本法の本質において、第一の使命の教育は「知の伝承」を通して広く人材を育成すること、第二の使命の研究は、最先端の研究活動を行い「知の創造」、「知的体系の構築」のため深く真理を探究するということです。また、大学における創造的な研究活動には、その過程に学生たちを積極的に参加させ、次世代を担う優秀な人材を育成するという重要な機能があります。このように、大学における教育と研究は車の両輪をなすものであり、不即不離でなければなりません。第三の使命の社会貢献にはいろいろな形態があり、知の社会発信、産官学連携、政策提言、附属病院の高度医療など多様な展開が可能です。

このような多様性を特徴とする大学の使命を果たすべく、時流に流されることなく、凜とした気概を持ち、学術の府としてその存在を国内外に示し、同時に京都という誇りと文化に満ちた環境下で、教養



人、国際人、世界的研究者を輩出し続けることができるよう、京都大学を確固たる戦略のもとで運営していくことが求められています。

大学こそが知の源泉であり、<sup>えんよく</sup>衍沃な大地のごとく、我が国および人類

の将来にとって人材と研究成果を生み出す欠くべからざる存在と考えます。

言うまでもなく、大学の根本は教育と研究です。それらをさらに充実するためには、教員、職員が誇りを持って仕事に取り組むことができ、その中で優れた学生が育成され、そしてその学術環境が持続可能であることが必要です。人材こそが大学の最も大きな資産であります。それを活かすためには、教職員を今以上に大切にする雰囲気醸成することが肝要です。すなわち、教員が教育や研究に専念できる抜本的な体制作りが喫緊の課題です。また、教育・研究・医療を支える職員が誇りと向上心を持てる体制を確立することも重要です。そのため、教育支援、学生支援に加えて、確固とした財務基盤、研究支援、国際交流支援、環境施設整備を強化する大学全体としての戦略がなければなりません。

大学には語るべき多くの項目がありますが、今回は以下の、教育、研究、人材活用、国際化、アウトリーチ、基盤整備について考えを述べてみたいと思います。

### 1) 教育について

教育は大学の根幹をなす活動です。国際社会においてリーダーとなりうる優れた人材を輩出する教育システムとその実績がますます重要な大学の評価基準となります。とくに、国際舞台では、高度な専門性を基盤とする発言力、研究成果の発信力、コミュニケーション能力などが必須とされます。さらに、世界のリーダーに広く見られるように、深い教養と高い識見も求められます。私は「学問は真理をめぐり人間関係」と考えており、この資質を大学において涵養することは大変重要と考えます。そのために

は、理系、文系を分かつ主として学部1, 2回生の時期に、全人教育が十分行えるシステムが必要です。そこでは、専門基礎は最小限にとどめ、リベラルアーツの科目を中心にして人間力涵養をはかることが重要と思います。若い時代に多くの人に出会い、異分野にまたがる友人ネットワークを築くことは生涯の宝となります。

学部・大学院時代の専門教育は、学生に対して専門家としての基盤を築かせる重要な大学の活動です。大学全体の教育理念や教育制度のあり方についても十分な議論を尽くすとともに、教育の理想と時代の要請に応えることができるよう、必要であれば改革についても積極的な取り組みを進めていきたいと考えています。

ただし、全人教育や全学的な専門教育の制度改革は短期間にできるものではありません。10年先の京都大学の教育目標を定めて、全部局が協力して教員配置・役割分担も含めてじっくりと議論する必要があります。また、教育環境整備も計画的に全学で推進すべき課題です。諸外国の大学環境に比し、現在の京都大学の教育環境設備にはさらに改善すべき余地があります。

対話を根幹とした自学自習・自得自発という理念を実現する上でも、履修支援、進路指導、キャリアサポート等を全学的に検討し、学生支援をさらに充実していく必要があります。

## 2) 研究について

研究は教育とともに重要な大学の使命です。研究大学として京都大学はこれまで多くの実績を挙げてきました。本学は、世界をリードする自然科学、人文科学、社会科学の基礎から応用までの幅広い研究分野において大きな足跡を残し、伝統を築いてきました。しかし、国内外の大学のグローバル戦略が進行する中、安閑としていられる状況にはありません。総合大学の長所を生かすためには、競争的資金になじまない基礎分野、長期の研究期間を必要とする研究分野などをしっかりと支援する財政的仕組みを構築する必要があります。

これまでに基礎学術分野を学内的に支援する全学協力経費に競争的資金等の間接経費と寄附金の一部を充当してきました。このような学内制度を効果的に機能させることで、競争的資金を獲得できる研究分野の推進のみならず、大学全体の学術研究の健全

な発展を支えることが可能となります。

世界レベルの研究競争を勝ち抜くためには、学会、国内・国際共同研究、産官学共同研究などに対して開かれた研究体制のもとで、教員個々人が切磋琢磨することが求められます。そのためには、教員が可能な限り研究に専念できるように、全学的な支援体制を考えねばなりません。さらに、“白眉”と呼ぶような優秀な若手研究者をいかに確保し、次世代研究者として育成するかが、今後の研究大学、高等教育機関としての最優先事項です。

グローバルCOEプログラム、科学振興調整費、受託研究等の申請段階からの支援に加えて、これらが採択された場合の各種支援を全学で組織的に行うことも今後は必要不可欠です。また山中伸弥教授のiPS細胞研究など、傑出した研究成果を出した研究グループへの積極的な全学支援ができる体制作りも、今後の画期的な成果を目指す教員にとって大きな励みになると思います。すなわち、申請書作成、報告書作成、経理処理、科学コミュニケーション等の全学的な人的・物的支援は、個別支援よりも、より効果的と考えられるからです。

また、社会や学術の情勢変化に柔軟に対応できるよう、全学の部局組織を超えた人事交流や研究グループ形成を円滑に進めることができる制度を構築する必要があります。

## 3) 人材の活用について

中間職種の創設と多様な人材(女性・外国人等)の活用は本学にとって重要な課題です。

国立大学時代には、教員・職員間の意思疎通が十分とは言えない部分もありました。法人化後は教員と職員とが協力して問題解決にあたらなければならない難問が山積し、教職協働の意識と行動が一層重要になってきています。従来委員会の陪席だけでは職員は十分に自らの意見を述べるができなかったもので、私が所掌する委員会などでは職員も委員として参画するように勧めてきました。今後は全学的に教員と職員が共に議論し、新しいことにチャレンジできる体制作りを進めていきます。その中でルーティンワークだけでなく、専門的な業務のできる職員を中間職(アカデミックスタッフ)として位置づける制度を創設し、積極的に学内に配置していきたいと思います。専門化した中間職種の職員を増やして、教員が本来の教育・研究に専念できる環境の構

築を目指します。

京都大学における女性研究者、女性職員の数はまだまだ男女共同参画からほど遠い状態にあると考えます。これを改善するためには、キャリア・パスの各段階で女性が不利になる条件を一つ一つ取り除いていく必要があります。また、教育や研究の現場を外国人に開かれた環境にすることも京都大学の国際的プレゼンスの向上、グローバルスタンダードへの大学の対応の道筋と考えます。もちろん無理な数値目標を定め、教員・職員の質を犠牲にはできません。言語・生活環境の地道な整備によって状況を改善していく必要があります。

#### 4) 国際化について

世界中の主要大学は国際連携を積極的に進めています。京都大学にも海外から多くの連携の打診があります。京都大学はアジア、特に東南アジアで活発なフィールド研究活動を展開しており、強固なネットワークを構築しています。東アジア、アフリカにも研究教育拠点、連携拠点の展開が進んでいます。しかし、先進欧米諸国の大学との学術連携は個々の研究者間、あるいは部局間にとどまっております、大学全体としての本格的な連携や協力関係のための拠点作りは遅れています。すなわち、南北だけでなく、東西(欧米)にも拠点ネットワークを構築し、京都大学の国際的プレゼンスを高め、優秀な留学生、研究者の確保を図ることが急務です。その実現のためには、欧州での拠点設置、米国でのネットワーク活用などの措置を迅速に講じる必要があります。

また、さらに国際化を進めるためには、留学生寮、外国人研究者の生活環境整備などを計画的に推進するとともに、外国人教員の増員も必要です。

#### 5) アウトリーチについて

大学のアウトリーチ活動は多様化し、すでにかんりの実績を京都大学は挙げてきました。広報、産官学連携、共同研究、地域連携等を通して京都大学の現状と将来構想、教育・研究の考え方などを社会や利害関係者に発信していますが、今後その機能をさらに強化する必要があります。同時に、国際社会に対して学術誌、マスメディアなどを通じた発信のみならず、教職員が積極的に国際舞台で活躍することが必要であると思います。

アウトリーチ活動の一環として、博士学位取得者を、キャリアサポートセンターや教育研究現場での十分な研修の後に、企業、官庁、地方公共団体などに派遣する制度なども、広い知識を身につけさせる機会として有効であると思います。

#### 6) 基盤整備について

国立大学時代には、大学のキャンパス整備、施設整備、大型研究設備整備等の各種インフラ整備は文部科学省など国の所掌事項でした。しかし、法人化後は、これらの整備は基本的には各大学法人が進めるべき事項となりました。このインフラ整備財源確保は今後の大学運営にとって難問ですが、目的積入金や寄附金、基金利益などの活用によって計画的に進める必要があります。とくに早急に行わなければならない対象は、遅れている桂キャンパスの整備の他、学生寮、職員宿舎、学生課外活動拠点、図書館、駐輪場、病院駐車場などの整備です。施設整備のみならず、キャンパス間交通網、環境安全リスク管理システム、共通情報システムの構築、研究者総覧データベースの充実など多くのインフラ整備が必要であり、これらの課題に積極的に取り組んでいきたいと思ひます。

私は人こそ大学の礎と考えています。すなわち、教員・職員ともに能力を発揮することができる職場として大学の制度・仕組・意識などを改革し、魅力・活力・実力ある大学にしていきたいと思ひます。

総長就任に際し、長尾真元総長から「楽天知命」と揮毫された書をいただきました。これは、易学からとられたもので、「天を楽しみて命を知る」と読み、天命を受け入れて、自分の使命を全うせよ、とも解釈できるようです。大学を取り巻く社会状況はますます厳しくなっておりますが、なによりも学術の府として、京都大学の伝統である対話を重ね、構成員全員が誇りを持って京都大学の明るい未来に向けて前進し、社会の期待に応えていかねばなりません。そのために粉骨砕身努力する所存です。皆様のご協力を心よりお願い申し上げます。

## 大学の動き

### 松本 紘理事・副学長が第25代総長に就任

尾池和夫総長の任期満了に伴い、10月1日、松本紘理事・副学長が本学第25代総長に就任した。

総長就任式は、10月2日(木)午前10時30分から本部棟大会議室において、本部等の職員が出席して行われた。

松本総長は就任挨拶の中で「10年後の理想的な京都大学をイメージし、その理想の実現のために着実なアクションプランを立て、対話を重視し、全学の協力のもと、魅力・活力・実力ある京都大学を実現していく。」と、決意と抱負を述べた。

また、総長交代式が同14日(火)午後5時から百周年時計台記念館国際交流ホールにおいて、岡本道雄、西島安則、井村裕夫元総長をはじめ各理事、部局長及び教職員約200名の参加を得て行われた。

総長交代式では、教職員を代表して富田眞治情報

学研究科長から送迎のことが述べられた後、尾池前総長、松本総長からそれぞれ挨拶があった。



総長交代式で就任挨拶を述べる松本総長

### 理事等が発令される

現理事及び経営協議会委員の任期満了に伴い、10月1日付けで理事及び経営協議会委員が任命された。

#### ◆理事

任期：平成20年10月1日～平成22年9月30日



財務・産官学連携担当  
(副学長)  
塩田 浩平



企画・評価担当  
(副学長)  
江崎 信芳



総務・人事・広報担当  
(副学長)  
大西 珠枝



施設・情報担当  
(副学長)  
大西 有三



教育・学生・国際(教育)担当  
(副学長)  
西村 周三



研究・国際(研究)担当  
(副学長)  
藤井 信孝



外部戦略担当  
(副学長)  
吉川 潔

◆経営協議会委員学外委員

任期：平成20年10月1日～平成22年9月30日



有本 建男  
独立行政法人科学技術振興機構  
社会技術研究開発センター長



宇治 則孝  
日本電信電話(株)  
代表取締役副社長



北 徹  
神戸市立医療センター  
中央市民病院長



国谷 裕子  
キャスター



佐藤 禎一  
東京国立博物館長



立石 義雄  
オムロン(株)  
代表取締役会長



土岐 憲三  
立命館大学教授



Patrick Chocat  
サノフィ・アベンティス(株)  
代表取締役社長



ふこの 畚野 信義  
(株)国際電気通信基礎技術研究所  
相談役



町田 勝彦  
シャープ(株)  
代表取締役会長 兼 CEO



森 雅彦  
(株)森精機製作所  
取締役社長



山田 啓二  
京都府知事

## 部局長の交替等 (新任)

### 医学研究科長・医学部長

光山正雄医学研究科教授(医学専攻感染・免疫学講座担当(細菌学, 感染免疫学))が, 塩田浩平医学研究科長の後任として, 10月1日付けで選出された。任期は平成22年9月30日まで。



### 薬学研究科長・薬学部長

伊藤信行薬学研究科教授(生命薬科学専攻生体機能薬学講座担当(遺伝子薬学))が, 藤井信孝薬学研究科長の後任として, 10月1日付けで選出された。任期は平成22年3月31日まで。



### 地球環境学堂長・地球環境学舎長

小林慎太郎地球環境学堂教授(資源循環学廊担当(農業土木学・農村計画学))が, 嘉門雅史地球環境学堂長の後任として, 10月1日付けで選出された。任期は平成22年9月30日まで。



### 先端技術グローバルリーダー養成ユニット長

森澤眞輔工学研究科教授(都市環境工学専攻環境デザイン工学講座担当(環境デザイン工学, 環境リスク管理, 放射線衛生工学))が, 10月1日付けで先端技術グローバルリーダー養成ユニット長に選出された。任期は平成22年3月31日まで。



(再任)

### 女性研究者支援センター長

稲葉カヨ生命科学研究所教授(高次生命科学専攻体制統御学講座担当(免疫学))が、9月5日付けで女性研究者支援センター長に再任された。任期は平成22年9月4日まで。

## 尾池総長がAEARU総会・理事会を主宰 —中国科学技術大学50周年創立祝典出席，上海交通大学表敬訪問—

尾池和夫総長は、9月19日から22日までの間、中華人民共和国に次のような目的で出張した。安徽省合肥市の中国科学技術大学をホスト校として開催された第14回東アジア研究型大学協会(AEARU)年次総会及び第23回理事会に出席し、議長校である京都大学を代表して両会議を主宰した。



AEARU 総会・理事会で議事主宰する尾池総長

主な議題は、2007年初以降実施済み事業のレビュー、今後の活動予定の討議のほか、新規事業登録方式の柔軟化、研究型大学における学部教育国際化の取組みについての新たな提案であった。この過程で、本学が、10月に復旦大学の協力を得て同大学構内で、中国の若手の医学・生命科学研究者を主な対象に開催する予定の「第11回京都大学国際シンポジウム」もAEARU協賛事業として承認された。

なお、20日の午前中は、中国科学技術大学建学50周

年の祝典が同大学講堂で挙行され、総長は来賓として、他のAEARU加盟校である北京大学、清華大学(北京)、復旦大学、



AEARU 参加大学代表

南京大学、台湾大学、清華大学(新竹)、浦項工科大学の各学長ほかの加盟校代表とともに列席し、祝意を表した。会議終了後の21日に上海に移動し、大学間協定校の上海交通大学の張傑学長と懇談し、翌22日、上



上海交通大学(蔡威副学長)表敬訪問

海市西南地区にある同大学新キャンパスを訪問、蔡威副学長、金緯国際合作与交流処長と、今後の連携につき意見交換し、その後、同大学工程センター及び新入生の工学実習を視察した。

本出張には、西村周三理事・副学長、横山俊夫国際交流推進機構長・副学長、エイズブリー・ケアー国際交流課特定職員が随行した。

(国際部)

## 全学教育シンポジウム「京都大学における教育の現状と将来を考察する －第Ⅰ期から第Ⅱ期へ向けて－」を開催

9月12日(金)・13日(土)の両日、兵庫県立淡路夢舞台国際会議場において、教職員262名の参加を得て、「京都大学における教育の現状と将来を考察する－第Ⅰ期から第Ⅱ期へ向けて－」をテーマとする全学教育シンポジウムを開催した。



尾池総長の基調講演

このシンポジウムは1泊2日の討論集会の形で、参加者が教育について全学的な議論や意見を交わすことにより共通理解を深め、今後の教育の改善・充実に資するとともに、部局の枠を越えた教職員の交流の場となることを目指して、平成8年から開催され、今回が第12回となる。

国立大学法人化後5年目となる平成20年度は、本学にとって様々な意味で節目となる年である。まず、第Ⅰ期中期目標・中期計画の終了1年前に当たり、計画の評価と並行して、次期中期目標の策定に本格的に着手しなければならない。また、10月には本学役員の交替もあり、新総長をはじめ新たに選出された役員の方々に本学の舵取りが引き継がれる予定である。

このような状況の中、今回のシンポジウムでは、尾池和夫総長より法人化後の本学の教育について総括していただくとともに、松本 紘次期総長にその将来への抱負を語っていただくことを第1の目的とした。また、分科会テーマとして、(1)全学共通教育の現状と課題、(2)教育の国際化に向けて、(3)研究所・センターの学部教育参加、(4)これからの職

員が果たすべき役割、4つを設定して、今後の方向性を明らかにすることを第2の目的とした。

シンポジウムは、北村隆行高等教育研究開発推進機構長の司会により進められ、初日は尾池総長による基調講演、丸山正樹理事による「法人化後の本学の教育について」と題する報告、北村機構長らによる上記4テーマについての問題提起の後、それぞれのテーマに分かれての分科会討論、さらに深夜にまで及ぶフリー討論が行われた。

2日目は、各分科会報告を含むパネルディスカッションに続いて、松本次期総長の講演が行われ、本学が今後進むべき教育のあり方に関して、2日間に渡り終始活発な議論が展開され盛会のうちに終了した。



松本次期総長の講演

2日目は、各分科会報告を含むパネルディスカッションに続いて、松本次期総長の講演が行われ、本学が今後進むべき教育のあり方に関して、2日間に渡り終始活発な議論が展開され盛会のうちに終了した。



2日目のパネルディスカッション

(教育推進部)

## 京都大学と京都精華大学との 連携協力に関する基本協定書の締結及びマンガ完成披露

9月17日に京都精華大学との連携協力に関する基本協定を締結した。

大学の広報活動を重視する京都大学尾池総長の発案により、京都大学を身近に感じてもらう目的で「マンガによる京都大学紹介冊子」を作成することになった。尾池総長から、マンガ学部を擁する京都精華大学の島本学長に話を持ちかけられ、両大学の教職

員・学生参加のもとマンガプロジェクトを立ち上げ、平成18年8月から具体的な作業が始まった。様々な問題を乗り越え、ようやく完成にこぎ着け発表することになった。

その作成段階において、マンガ作成に関わっている双方の教職員から、本学と京都精華大学との間でもっといろいろなことで連携協力できるのではない

かといった提案がなされ、尾池総長及び島本学長が連携協定を締結する方向性について了解された。その後、両大学の関係会議において、マンガプロジェクトをさらに発展させる目的で、本協定を締結することが了承され、協定書調印式を迎えるに至った。

どういった協力ができるのか、どのような協力事業が実現できるのかということについては今後検討することになっているが、今回は基本的な連携協力の事項を取り決めた。

本協定は、同じ左京区に位置する大学として、教育研究のみならず、共同事業や教職員・学生の交流などを進めていこうとするものである。芸術に力を入れておられる京都精華大学と、芸術系学部がない本学との間で、今後様々な共同事業が実施できるのではないかと考えている。また、今回のような学生同士力を合わせたプロジェクトを進めていく予定である。

このマンガは、6本のストーリーからなり、その6本のストーリーをつなぐ案内を京都精華大学の竹宮恵子マンガ学部長が描かれている。マンガについては、京都大学と京都精華大学の学生が取材に行き、京都精華大学の学生が作画するといったように両大学の学生が協力し合って完成した。また、巻末には資料編をつけている。

#### 目次「MANGA Kyoto University」

1. 子ども博物館へようこそ
2. 平安京見学ツアー
3. チンパンジー物語
4. 何でも治せる？万能細胞
5. ウミガメと俺
6. 散歩日和

#### ○ 資料編

京大トリビア

数字で見る京大生

百周年時計台記念館 大解剖!!



左から京都大学 鈴木晶子教育学研究科教授、大西珠枝理事・副学長、尾池和夫総長、京都精華大学 牧野圭一マンガ学部前学部長、島本 澁学長、竹宮恵子マンガ学部長

なお、このマンガは近畿地区の中学校・高等学校、公立図書館、予備校などに無償で配付されている。



(広報センター(現：総務部広報課))

## 博士学位授与式

9月24日(水)午前10時30分から、百周年時計台記念館において、尾池和夫総長、東山紘久理事・副学長(教育・学生担当)をはじめ、各研究科長・学舎長出席のもと、博士学位授与式が挙行された。

総長から、各授与者に対し学位記(平成20年7月23日付、同20年9月24日付)が手渡された後、総長

の式辞があり、午前11時35分に終了した。

各分野別内訳は次のとおりである。総長式辞は総長室ホームページに掲載されている。

[http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/profile/intro/president/archive/080924\\_1.htm](http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/profile/intro/president/archive/080924_1.htm)

学 位	平成20年 7 月			平成20年 9 月		
	課程博士	論文博士	計	課程博士	論文博士	計
博士 (文学)	4	2	6	—	1	1
博士 (教育学)	4	—	4	1	1	2
博士 (法学)	—	—	—	6	—	6
博士 (経済学)	—	3	3	8	2	10
博士 (理学)	7	—	7	4	1	5
博士 (医学)	13	4	17	8	4	12
博士 (医科学)	—	—	—	—	—	—
博士 (社会健康医学)	—	—	—	—	—	—
博士 (薬学)	—	1	1	—	—	—
博士 (工学)	3	2	5	38	1	39
博士 (農学)	1	6	7	3	1	4
博士 (人間・環境学)	2	—	2	1	1	2
博士 (エネルギー科学)	—	—	—	7	—	7
博士 (地域研究)	—	—	—	—	—	—
博士 (情報学)	—	—	—	7	—	7
博士 (生命科学)	—	—	—	7	—	7
博士 (地球環境学)	—	—	—	6	—	6
計	34	18	52	96	12	108



7月23日付 博士学位授与者



9月24日付 博士学位授与者

(教育推進部)

## 全学寄附研究部門の設置

10月1日、全学寄附研究部門として、「微生物科学寄附研究部門」が設置された。この寄附研究部門は、従来のように特定の「部局」に設置されるものではなく、本学で初めて「大学」に設置される寄附研究部門である。概要は以下のとおりである。

1. 名 称 微生物科学寄附研究部門  
(Research Division of Microbial Sciences)
2. 寄 附 者 財団法人 発酵研究所
3. 寄附金額 総額 2 億 5 千万円
4. 設置期間 平成20年10月1日～平成25年9月30日
5. 担当教員 特定教授(寄附講座) 小川 順
6. 研究目的 微生物科学研究の成果は、幅広い産業に波及している。このような微生物科学研究の広汎性を支えているのは、微生物機能の多様性である。本寄附研究部門では新たな発見を目指し、有用な微生物機能を多様性の中から探索することを基盤に、微生物機能の解析・応用を通して社会に貢献しうる独創的な新技術を開発することを目的とする。
7. 研究内容 循環型社会形成に資する環境保全技術などに有用な微生物機能の探索研究、ならびにその基盤となる微生物資源の収集・分類・保存に関する研

究、さらには、探索により得られた微生物機能の解析・応用開発に関する研究・教育を実施する。

8. 研究課題 「新規微生物機能の探索を基盤とした環境保全技術の開発」を中心とした微生物科学研究に取り組む。すなわち、有用物質生産のためのバイオプロセス開発、エネルギー生産、環境浄化などに有用な微生物機能の探索・開発を基盤に、新しい発見を目指した独創的な研究を行う。また、これらの研究開発の過程を通じて微生物学教育を支援することにより、次世代の微生物研究者の育成を図る。さらに、本学の関連研究科等には微生物学研究を行っている研究室が複数あり、これらと本寄附研究部門が共同研究や情報交換を行うことにより、本学の微生物科学研究のさらなる進展に寄与する。

## 部局の動き

## 「第15回JSPS拠点大学交流事業『都市環境』日中合同会議」を開催

工学研究科では、9月2日(火)～3日(水)の2日間にわたって、豊橋技術科学大学の協力を得て、「第15回JSPS拠点大学交流事業『都市環境』日中合同会議」を豊橋商工会議所にて開催した。本事業は、物質文明社会における公害問題の解決のみならず人の行動規範として省資源・省エネルギーを強く意識した、自然との共生を図りうる資源循環型社会の構築を目的とするもので、拠点大学である本学及び清華大学(中国)に加え、日本側32大学及び中国側9大学の協力大学の研究者計324名(日本側138名、中国側186名)の参加を得ている事業で、今年度で開始より8年目を迎えた。

豊橋技術科学大学の北田敏廣教授が取りまとめを行った今回の会議では、本事業のコーディネーターである津野 洋工学研究科教授及びHAO Jiming 清華大学教授をはじめとした計50名(日本側24名、中国側26名)の研究者が参加し、「大気汚染制



セッションの様子

御・管理」及び「廃棄物制御管理と資源化」の2つのテーマの下、7セッションにて活発な議論が行われ、更なる学术交流の発展が期待できる内容となった。

また、会議に引き続き、早川勝豊橋市長を表敬訪問し、本事業と今回の会議について説明を行ったほか、日中両国の環境問題等について意見交換を行った。

今後も工学研究科では、本事業を通じ、多くの学術成果を挙げるとともに、途上国等の環境問題解決という観点から、国際社会への貢献を目指していく所存である。



早川勝豊橋市長を表敬訪問

(大学院工学研究科)

## 低温物質科学研究センター新研究棟落成式を挙る

8月19日(火)、低温物質科学研究センター新研究棟落成式が本部構内総合研究5号館において開催され、尾池和夫総長、松本 紘、大西珠枝両理事・副学長をはじめ、関係者約40名が出席した。式典では前川覚センター長の開会の辞の後、尾池総長からセンター設立時のエピソードを交えた挨拶があった。引き続き、齋藤軍治前センター長からセンターの将来に期待を寄せる挨拶があった。式典に続き、研究施設の見学会が行われ、3班に分かれてクリーンルーム、共同利用実験室、超低温MRI/NMR実験装置、超低温電子顕微鏡



クリーンルームを見学

の見学が行われた。センターにおける低温科学およびナノサイエンスを中心とした物質科学研究の現場に触れ、担当者と活発な意見交換が行われた。最後に懇談会では、総長、理事や出席者の間で和やかに歓談が行われ、盛会のうちに終了した。



総合研究5号館前

(低温物質科学研究センター)

## 寄附講座の設置，更新

10月1日に大学院薬学研究科に寄附講座「システム創薬科学講座」が新設され，大学院医学研究科の寄附講座「探索臨床腫瘍学講座」が更新された。概要は以下のとおりである。

### ● システム創薬科学講座(新設)

- |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1. 部 局 名 大学院薬学研究科</p> <p>2. 名 称 システム創薬科学講座<br/>(Department of Systems Bioscience for Drug Discovery)</p> <p>3. 寄 附 者 小野薬品工業株式会社</p> <p>4. 寄附金額 総額2億5千万円</p> <p>5. 設置期間 平成20年10月1日～平成25年9月30日</p> <p>6. 担当教員 特定教授(寄附講座) 奥野 恭史<br/>特定准教授(寄附講座) 瀬木 恵里</p> <p>7. 研究目的 多重標的創薬を志向した新たな創薬標的を探索する。</p> <p>8. 研究内容 脂質メディエーター受容体をはじめとするGPCRサブタイプに関して，複数受容体のダブル・トリプル欠損や薬物による複数GPCRシグナルの活性化(遮断)が細胞・組織・個体レベルのタンパク質機能や遺伝子発現にどのように影響するのかを，網</p> | <p>羅的かつシステムの的に解析し，ファーマコ・インフォマティクスを駆使して病態治療に有効な多重標的の可能性を探る。</p> <p>9. 研究課題</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・脂質メディエーター受容体をはじめとするGPCRサブタイプの生理・病態プロセスに伴う発現変動をシステムの的に解析する。</li> <li>・GPCRサブタイプの単独・複数欠損(活性化)が生体の分子・細胞・システム生理に与える影響を解析し，各サブタイプの生理的役割を理解する。</li> <li>・生理・病態局所における単独あるいは複数GPCRサブタイプの活性化(遮断)の影響を時空間的に解析し，病態治療に最適なサブタイプ・コンビネーションを探る。</li> </ul> |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

### ◆ 探索臨床腫瘍学講座(更新)

- |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1. 部 局 名 大学院医学研究科</p> <p>2. 名 称 探索臨床腫瘍学講座<br/>(Department of Translational Clinical Oncology)</p> <p>3. 寄 附 者 大鵬薬品工業株式会社</p> <p>4. 寄附金額 総額2億5千万円</p> <p>5. 設置期間 平成20年10月1日～平成25年9月30日<br/>(平成15年10月1日設置)</p> <p>6. 担当教員 特定准教授(寄附講座) 柳原 一広<br/>特定講師(寄附講座) 西村 貴文<br/>特定助教(寄附講座) 北野 俊行<br/>松本 繁巳</p> <p>7. 研究目的 国際的な臨床腫瘍学研究の拠点形成を目標として，新しいコンセプトに基づく標準療法および新規抗がん剤の開発をゲノム医学，ゲノム薬理的観点から行い，がん治療の進歩に資する。</p> | <p>8. 研究内容 各関連講座や各組織，他大学とも連携し，シーズの選択的サーベイランスを行い，有望なシーズの臨床開発を行うとともに，抗がん剤について薬理的観点から薬物動態学および薬力学解析による毒性発現を管理し，薬理遺伝学的解析を推進して個別化医療を実現するとともに各種バイオマーカーの開発を行う。</p> <p>9. 研究課題</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・新しいコンセプトに基づく標準療法の開発・研究</li> <li>・ゲノム医学，ゲノム薬理的観点からの新規抗がん剤の開発・研究</li> <li>・ゲノム薬理遺伝学的解析によるバイオマーカーの検出と候補遺伝子を基にした新規治療法の開発・研究</li> </ul> |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

## 寸言

## 大学の国際評価に触発されて

村上 憲郎

先月、中国の上海交通大学高等教育研究所というところが、「08年世界の大学学術ランキング」なるものを発表した。東大が19位、本学は23位、アジアでは、1位と2位であった。評価基準の妥当性の問題もあり、この結果に一喜一憂



する必要は全く無いが、大学の評価が国際化しつつあるということだけは、確認しておく必要があると思われる。特に、18位までの16校は、米国の大学で占められたという点に、少し考えさせられるところがあることも、否定できない。ここでは、このランキングの評価基準では、直接的には評価されていないように思われる教育という点に敢えて注目して勝手な私見を述べさせてもらうことにしたい。

本学は、その基本理念の第3項、第4項で、以下のようにその教育理念を謳っている。

3. 京都大学は、多様かつ調和のとれた教育体系のもと、対話を根幹として自学自習を促し、卓越した知の継承と創造的精神の涵養につとめる。
4. 京都大学は、教養が豊かで人間性が高く責任を重んじ、地球社会の調和ある共存に寄与する、優れた研究者と高度の専門能力をもつ人材を育成する。

本学の教職員の皆様が、この理念に従って日夜努力続けておられるであろうことに、筆者は何らの疑いも持っていない。ただ、この格調高い理念が、教育現場の現状を覆い隠してはいないかと、勝手に危惧するものである。危惧とは、理想と現実の乖離が、現実をますます悪化させるという危惧である。そこで、勝手のついでに、敢えて身も蓋も無い提言を唐突に提示したい。

1. 理科系の入学後の2年次に渡る教育のゴールのトップを、「量子力学を全員に習得させる」と明確に宣言し、それに必要な数学・物理学の教育は、最短時間をもってそれを実現するための最小内容に削ぎ落とし、トレーニングとして実施する。

何故か。日本の理科系教育において、今最も喫緊の課題は、如何にして複雑怪奇なコンセプトをなるべく早く習得させるかであるからである。現状は、全く逆である。すなわち、簡単なコンセプトを使うだけの、しかし複雑怪奇な枝葉末節に拘泥させられているのが、日本の若者たちの現状である。四則演算の範囲で解答できる複雑怪奇な算数問題を課せられている中学受験生然り、頂点が原点にある2次関数のみに限定された複雑怪奇な問題を課せられている高校受験生然り、1変数に限定された微積分の複雑怪奇な問題を課されている大学受験生然り。大学として、入学前のこのような現状に直接的な影響力を行使できないのならば、受け入れ後の自らの教育を複雑怪奇なコンセプトをなるべく早く習得させるという方向に逆転するしかない。複雑怪奇なコンセプトの数ある中で、理科系において最も大事なものは、敢えて1つ挙げるとすれば、量子力学であることに、多数派を形成するであろうことだけは、筆者の独断ではないといえるであろう。それへ向けての数学・物理学とは、線形代数・微分方程式・フーリエ変換・解析力学であるので、その内容が、最小内容にまで削ぎ落とされていたとしても、理科系2年次までの内容としても必要な最低線は押さえているということも、量子力学をゴールとして設定する理由である。

さて、先の提言で、「トレーニングとして実施する」と書いた。この意は、ある単元を修了すると、何が出来るようになるかを、教職員が学生に保証するという意である。具体的には、その多くは、この数式操作が出来るようになるという意味での一連の問題が解けるようになることを保証することである。たとえば、固有値を求めることが出来ることを保証する。ただし、工夫のいるような問題は削ぎ落としの対象である。つまり、そのような問題が解けることは、保証しない。こうすることによって、複雑怪奇な枝葉末節に拘泥することを未然防止する。それと、多くは無いが、重要なコンセプトを、数式操作とその解釈として明快に説明できることを保証する。たとえば、並進対称性が運動量とエネルギーの保存則の根拠であることを、オイラー・ラグランジェ方程式から、説明できるようになることを保証する。言い換えれば、解析力学の複雑怪奇な力学問題は、削ぎ落としの対象なので解けるようになることは、保

証しないが、このような重要なコンセプトを明快に理解出来るようになることは、保証する。そこで、またまた、唐突な提言である。

2. この量子力学の習得にいたる一連の講義・教材をすべて京都大学オープンコースウェアとして公開する。

何故か。履修中の学生が、いつでもどこでも、繰り返して、予習・復習できる環境を提供することが、その第一の目的である。出席率が落ちることが危惧されるかもしれないが、実際の講義では、頻繁にクイズを課して達成度をチェックし、レベルに達していないものに対しては補習を実施し、単元毎の保証を担保していくのが教職員の権利であるので、それに応える程度の勤勉さを維持できない学生は、排除してよいものとするにより、欠席を出来る限り防止する。このコースは、教職員の保証と学生の勤勉との交換契約によって成り立つことも、明快に宣言しておく必要がある。

もう1つの目的は、本学入学希望者の中の先進的な高校生の比率を高めることである。入学者のアンケートを取って見ればすぐにわかることであるが、本学の理科系に大量の入学生を送り込んで来る所謂進学校の高校生は、高1の間に高校数学の最終課程である数Ⅲ・Cの基本を習得済みである。在学している高校で習得しているのではない。学外の塾や予備校で習得しているのである。それにもかかわらず、彼らは、高2・高3・下手をすれば浪人と、2・3年、複雑怪奇な問題と格闘させられて、才能を無駄遣いさせられている。この一群の高校生にこのコースをオープンコースウェアとして提供し、このコースの達成度をテストする数学入試選択科目を設定し、従来の数学入試科目のどちらでも受験できるようにする。従来の数学入試科目で受験して入学してきた学生の中にも、このコースウェアに取り組んだ者がいることも期待できるので、入学後、希望者には達成度測定試験を実施し、コースの途中編入の便宜を図る。こうすることによって、意欲のある先進的な入学者をより多く獲得できる。もちろん、生き馬の目を抜くような受験業界においては、これ幸いと、この一見「安楽ルート」を抜け道に使おうという不心得者が現れると思われるので、この数学入試選択科目を選択する受験生は、TOEFL 何点以上を獲得済みとの条件を入れ、加えて、英語入試の問題も

大学院入試英語並みの特別試験とすることにより、その「安楽度」を下げる。

さて、実は、以上の提言は、本学の「普通の」学生を想定した提言である。一方、教職員の方は知っているように、毎年、ある人数の特殊な才能を持った学生が入学して来る。所謂「宇宙人」である。その特徴は、今までの話になぞらえて説明すると、修練なしで、複雑怪奇な問題が何故か解けてしまう。あるいは、複雑怪奇なコンセプトが何なく腑に落ちる。こういう才能に対して、どのような教育というか指導を施して、学問研究の最先端に一刻も早く送り込むにはどうするかという課題は、国際評価という観点からも、きわめて重要である。また、「宇宙人」とは、異なる才能として、これもある人数が入学してくる所謂「手業に長けた」才能の持ち主がいる。実験装置を作らせると、右に出る者がいない。メカニズムの創造性が群を抜いているという才能である。研究室のLANを組み上げさせると、たちどころに立ち上げて、以後の保守も玄人はだしであるという才能の持ち主も入学してくる。少し違う手業であるが、私の分野で言うと、コンピュータ・プログラムを書かせると、見事なコードが湧き出て来るという才能がある。少し説明させてもらおうと、プログラミングという作業は著述に似たところがあって、語彙が豊富だからといって芥川賞が取れるわけではないように、才能が要る。このような様々な「手業師」の才能をどう開花させていくかも、国際評価という観点から重要である。

今回の独りよがりの提言は、そのような才能に恵まれていない大多数の「普通の」学生に、これら特殊な才能に恵まれた学生と同じような成果を生み出してもらう機会を、どう作っていくかというためのものである。読まれた教職員の方々は、日々そのような目的のために懸命な努力を傾注されており、きっと実情に疎い私の提言以上に効果的な施策を実行中である方も大勢いらっしゃると思われるが、あえて乱暴な提言を申し上げたのは、何か、乱暴さの中に、乱暴さゆえのヒントが潜んでいればと思ったからである。ご寛容を願いたい。

(むらかみ のりお グーグルジャパン代表取締役社長 昭和45年3月工学部卒)

## 随想

ベネディクト・アンダーソンを  
追い掛けて

名誉教授 加藤 剛



早いもので京都大学を辞して3年半が経った。この間の感慨については、東南アジア研究所のニューズレター2008年No.58に「おかげさまの記」というエッセイを書いた([http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/edit/publications/PR/index\\_ja.htmURL](http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/edit/publications/PR/index_ja.htmURL))。見ていただける方があれば幸いである。ここでは、今夏のアメリカ滞在について書くことにしたい。滞在先は大学院生活を送ったコーネル大学で、宿泊先はかつての指導教員ベネディクト・アンダーソン宅である。

**マルガリータで乾杯!** アンダーソンは、世界的に有名になったナショナリズム研究の古典『想像の共同体』の著者だ。これまでに公認版、海賊版を含め30を越える言語に翻訳され、最新増々補版(2006)の裏表紙によれば、1983年の初版以来、英語版の販売総数は25万部を越える。彼の家には、博論をまとめていた時期に2年ほど居候をさせてもらったことがあり、いろいろと思い出は尽きない。そのうちのひとつが、夏になると一緒によく飲んだマルガリータだ。テキーラに、オレンジのリキュールとライム果汁を混ぜたカクテルで、グラスの縁に塩をまぶして飲む。元々は70年代の半ばにメキシコでの国際会議に出席したアンダーソンが、「お土産」として持ち帰ったカクテル・レシピだった。今夏も夕方になると、毎日のようにこれで乾杯した。「Cheers とマルガリータのグラス空け積み重ねたる時を思いぬ」。

**贅沢な時間** 今回の滞在の目的は、アンダーソンのオリジナル原稿を日本語に訳すことだった。原稿の仮題は、『椰子殻椀の外へ』。内容的には、彼の知的遍歴を幼少時から現在まで辿ったもので、その過程で西洋古典学、地域研究、フィールドワーク、比較の枠組み、学際的研究といったトピックについて、彼の個人的体験、知識社会学的洞察、覇権と知に関する歴史的考察などを織り混ぜ、語っている。6章立ての原稿を、滞在予定の4週間弱で訳すことなど所詮無理で、第1章を訳したあとは、他章で感じた疑問点を中心に問答仕立ての対話を行なった。ソクラテスとプラトンの対話を気取る積りは毛頭ないが、1対1のゼミを受けているようで、マルガリータだけではない、知的になんとも贅沢な滞在となった。

**クリント・イーストウッドを追い掛けて** 2005年の

京大での最終講義を、わたしは「川の流れるように－教育研究人生、来し方行く末」と題し、その最後に「これで、おわり・・・ませんよ(うに)－クリント・イーストウッドを追い掛けて」という話をした。1930年生まれの大俳優イーストウッドは、キャリアの途中から映画の監督も手掛け、1992年、62歳で最初のアカデミー賞監督賞、2004年にも同賞に輝いた。後者は歴代監督賞受賞者中、最高齢だ。人間はある年齢に達すると自然と気力が衰え、大学教授でいえば、定年後はいくらその気でも研究成果など出せないと考えていた。したがってイーストウッドにはビックリした。そして「鹿も四足、馬も四足」的短絡思考に導かれ、大きな元気をももらったのである。

**人を突き動かすもの** アンダーソン原稿の最終章は定年後についてだ。じつはテニャー(終身在職権)制度のあるアメリカの大学では、年齢差別廃止の圧力もあり、現在定年は存在しない。アンダーソンの場合、60歳時の軽い心臓発作が転機となった。ストレス軽減を医者に勧められて段階的に引退することにし、2001年、65歳で完全に引退した。しかし引退したのは教授職であって、研究や知的創造、好奇心からではなかった。引退後、19世紀末から20世紀初頭にかけてグローバルに展開したアナーキズムについて、フィリピン・ナショナリストのホセ・リサールを中心に本にまとめ、そして大学院生時代にジャワで見つけた1947年刊の謎の書(植民地末期、日本占領期、独立戦争期についての華人インドネシア・ナショナリストの個人史で、インドネシア語を基本にしつつ複数の言語の語彙を混ぜ合わせて綴られている)の作者を同定し、これに詳しい注をつけたものを60年振りにインドネシアで復刻出版している。現在のパッションはアジア映画で、それと謎の書を著した稀有な作者の伝記を執筆予定である。

**カメの決意** 人の命には限りがある。それ以前に創造性の限界が確実にやって来るだろう。だが富も名誉も手に入れた高齢のイーストウッドやアンダーソンが、今でも想像し創造する力に突き動かされている様を見ると、欲得や権力だけではない人を動かすものの不思議と魅力を強く感じる。ウサギがひと眠りしてくれないのは、カメにとっては辛いものがある。しかし倒れるまで走り続けそうなウサギがいるのなら、カメとしては弱音を吐いている訳にはいかない。カメはカメなりのペースと気概をもって、イーストウッドやアンダーソンを追い掛けていきたい。

(かとう つよし 平成17年退職 元アジア・アフリカ地域研究研究科教授、専門は比較社会学、東南アジア研究)

## 洛書

## 京都の個人的な印象

大槻 知忠



私は5年前に京都に赴任してきました。その前は20年くらい東京に住み、さらにその前(高校生の頃まで)は大阪に住んでいました。こどもの頃は、京都というと、遠足や観光でいく場所であって、(フレンドリーな大阪に比べて)京都には何となくよそよそしい印象をもっていました。ここ数年京都に住んでみて、京都はいいところであるなあとおもうことがよくあります。

私が個人的にそうおもう理由の1つは徒歩圏に手頃に散策できる山がたくさんあることです。ずっと京都に住んでおられる方にとっては近くに山があるのはあたりまえのことかもしれませんが、たとえば、東京では、散策するのに手頃な山である高尾山は都心から電車を乗り換えて1時間以上かかります。東京で「山に行く」ときの距離感は京都で「海に行く」ときの距離感に近いのです。東京で長男がかよっていた保育所では当時は年長組は2ヶ月に1回くらいのペースで高尾山にのぼっていましたが、いつも帰路の電車では子どもたちは爆睡していましたし、山にのぼる以前に山まで電車で往復するのが大変なのです。一方、現在、次女がかよっている朱い実保育園では、吉田山は普段の散歩コースの1つですし、長女が朱い実保育園で比叡山遠足にいったときには山頂でみんなで凧あげをしたようで、そうやって余裕をもって気軽に山を歩くことができるというのはとてもいい環境であるとおもいます。また、私は以前に家族で京都一周トレイルを全部歩きましたが、京都一周トレイルは伏見稲荷から東山、北山を経て苔寺(西芳寺)にいたる全長約70kmのハイキングコースです。京都の街をおおむね一周する経路で、市街地から少だけ山にはいった部分にコースがとってあるので、通常の山登りとちがって、コースの途中の任意の場所から任意の場所まで気が向いたときに部分的に歩くことができます。(実際、何回かに分け

て歩きました。)コースは必ずしもメジャーな山道ではなく、たとえば、大文字山の山頂(3角点)から山を下るコースは、一般的な道は火床経由で銀閣寺におりる道ですが、トレイルでは山頂から楼門の滝を経由して霊鑑寺におりる道です。また、延暦寺から大原にぬける経路でも、あえて裏道にはいっていくような独特なコース設定がされていて、楽しく山道を散策することができます。

それから、京都で印象的であると私がおもうことは、ユニークさが抜きん出ているものがたくさんあることです。たとえば、「苔寺」にはグランドくらいの広さの苔の庭があります。他のお寺でも苔の庭があるところはあつて、苔がふかふかの絨毯のようにになっているのいい状態のようですが、普通は苔の庭の大きさはせいぜい教室くらいの大きさです。しかし苔寺はグランドくらいの大きさの庭の一面に苔がふかふかになっており、そういう状態を維持しておく手間はおそらく尋常ではないとおもわれます。それから、「あじさい寺」(三室戸寺)のあじさいも、グランドのような広さの庭があじさいのみで埋め尽くされています。普通は庭にはいろんな種類の草木を植えることが多いのではないかとおもいますが、なぜそんな膨大な量のあじさい一色なのか?、ある意味尋常ではありません。「伏見稲荷の鳥居」にも「東福寺の紅葉」にも「金平糖の専門店」にも「千日回峰行」にも並外れた情熱をかんじますし、人に感動を与えるくらいに「オンリーワン」であるものが京都にはたくさんあります。「出すぎた杭は打たれない」というか、「ユニークな方向に並外れた情熱」をリスペクトして育ててくれるような伝統や風土がきっと京都にはあるのでしょう。それが京都大学の学風の背景にもなっているように私にはおもえます。私は研究者として研究を進める方向を迷いながら選ぶときにそういうものをみると勇気づけられるような気持ちができることもあり、私が「京都にきてよかった」とおもうことの1つです。

(おおつき ともただ 数理解析研究所 准教授, 専門は位相幾何学)

## 栄誉

### 山中 伸弥 物質-細胞統合システム拠点iPS細胞研究センター長が武田医学賞を受賞

このたび、山中伸弥物質-細胞統合システム拠点 iPS 細胞研究センター長が武田医学賞を受賞された。贈呈式は、平成20年11月12日に東京ホテルオークラにて執り行われる予定である。



山中伸弥センター長は、昭和62年神戸大学医学部卒業後、大阪市立大学大学院医学研究科博士課程に進学、平成5年同課程修了。同年より Gladstone Institute にて博士研究員、University of California にて研究員、平成8年1月日本学術振興会特別研究員、同年10月大阪市立大学医学部薬理学教室助手、平成11年12月奈良先端科学技術大学院大学遺伝子教育研究センター助教授を経て、平成15年同大学遺伝子教育研究センター教授に就任。その後、平成16年10月京都大学再生医科学研究所教授、平成19年10月同大学物質-細胞統合システム拠点教授を経て、平成20年1月に同大学物質-細胞統合システム拠点 iPS 細胞研究センター長に就任し、現在に至っている。

また、平成16年度ゴールド・メダル「東京テクノ・フォーラム21賞」、平成18年度日本学術振興会賞、平成19年度大阪科学賞、同年度朝日賞、マイエンブルク賞、平成20年度ロベルトコッホ賞、科学技術特別賞、シヨウ賞等を受賞されている。

山中教授の受賞理由は、多能性幹細胞の維持と誘導に関する研究を行い、以下のような顕著な業績をあげられたことに対するものである。

- 1) ノックインマウスの線維芽細胞を用いた多能性誘導アッセイ系により、候補因子の中から4つの遺伝子(Oct 3/4, Sox 2, Klf 4, c-Myc)の導入で、ES細胞と形態、機能が近似した人工多能性幹細胞(Induced pluripotent stem cell)が樹立できることを見出した。
- 2) レトロウイルスによる遺伝子導入効率を向上させる工夫の上、マウスと同じ遺伝子セットを用いて、ヒト皮膚の初代培養線維芽細胞からヒト iPS 細胞の樹立にも成功した。そして、ヒト iPS 細胞は報告されているヒト ES 細胞に類似した形態、機能を示した。
- 3) レトロウイルスでゲノムに導入された c-Myc 遺伝子の再活性化によりキメラマウスに腫瘍が発生することが分かり、臨床への応用における課題とされた。しかし、iPS 細胞樹立法を改良することで c-Myc を用いず3因子だけでマウスおよびヒトの線維芽細胞から Myc-(マイナス) iPS 細胞を樹立することに成功し、安全面での課題を回避出来る可能性を示した。このことで、今後の細胞移植治療への応用、病因の究明や薬剤の毒性評価等を可能とした。

(物質-細胞統合システム拠点)

## 日誌

2008.8.1 ~ 8.31

8月5日 京都大学企業ナビフォーラム 知の戦略  
-革新と創造がひらく未来  
7日 オープンキャンパス2008(~8日まで)

12日 全学共通教育システム委員会  
26日 施設整備委員会  
企画委員会

## 話題

## 平成20年度京都大学新採用職員研修(後期)で宇治キャンパスを見学

新採用職員研修(後期)プログラムとして、9月4日(木)に宇治キャンパスの見学が実施された。研修生32人は柏原宇治地区事務部総務課長からキャンパス紹介と概要説明を受けた後、生存圏研究所エコ住宅実験棟「律周舎」で小松教授から自然素材を活用した木造軸組住宅の説明を受け、その居住性を体験した。また同研究所材鑑調査室では杉山教授及び反町技術職員から屋久杉の標本を用いた年輪年代学の解説を受け、また、香木をチップ化した標本、高級扇子で有名な白檀の原木、現在は世界で唯一同調査室が保有する法隆寺五重塔心柱材などの研究材料や貴重な標本に触れた。



杉山教授(中央左)から材鑑調査室の説明を受ける研修生

その後、防災研

究所境界層風洞実験室で加茂技術職員からビル風や構造物に対する強風被害の発生メカニズムの解説を受けた後、風洞実験装置で測定胴長21mに及ぶ風洞から吐出された強風を体感し、最後に同研究所強震応答・耐震構造実験室で市川技術職員の解説のもと大型震動台による加震実験を見学し、体験を主体とした有意義で興味深い研修プログラムを受講した。



市川技術職員(右)から強震応答・耐震構造実験室の説明を受ける研修生

(宇治地区事務部)

## 訃報

このたび、<sup>まつもと きよし</sup>松本 澄名誉教授、<sup>たなかきちの すけ</sup>田中吉之助名誉教授、<sup>うめむら いさお</sup>梅村 勲名誉教授が逝去されました。ここに謹んで追悼の意を表します。

以下に各名誉教授の略歴、業績等を紹介いたします。

## 松本 澄 名誉教授



松本 澄先生は、7月29日逝去された。享年69歳。

先生は、昭和38年3月京都大学理学部化学科を卒業し、同43年3月同大学院理学研究科博士課程を単位修得退学後、同年9月理学博士号を取得し、同年10月からアメリカ合衆国ネブラスカ大学、同44年10月からカナダ国アルバータ大学、同46年11月からドイツ連邦共和国ミュンヘン大学にて博士研究員として研究に従事された。同47年12月本学助教授(教養部)に就任し、平成2年教授に昇任された。同3年大学院人間・環境学研究科教授に配置換となり、同15年3月停年退官され、同年4月本学名誉教授の称号を授与された。その後、同20年3月まで千葉科学大学教授を務められた。

先生の本学における教官歴は31年の永きにわた

り、その間、教養部における化学基礎教育及び理学研究科大学院生の指導に従事し、総合人間学部及び大学院人間・環境学研究科発足後も、化学全学教育及び学部生・大学院生の指導に熱心に携わられた。

研究面においては、先生はミュンヘン学派の影響を強く受けられ、本学就任後は1,3-双極性反応を基盤とする「含窒素複素環化合物の合成と反応」に関する研究を精力的に推し進められた。また、「超高压環境における有機合成」に関する研究の日本のパイオニア及びリーダーとして、超高压有機反応の有効性を立証し、この研究分野の普及に尽力された。これらの研究成果は、200報を超える原著論文と多数の著書として報告されている。生涯変わらぬ先生の研究に対する真摯な態度は、長く記憶されるであろう。ご冥福をお祈りする。

(大学院人間・環境学研究科)

## 田中 吉之助 名誉教授



田中 吉之助先生は、8月17日逝去された。享年82歳。

先生は、昭和23年京都大学工学部機械工学科を卒業後、同大学院特別研究生(前期)を経て、同25年京都大学工学部講師に任ぜられ、同工学研究所助教授、同工学部助教授を経て同36年京都大学工学部教授に昇任、航空工学科構造力学講座(のち構造強度学講座)を担当された。平成元年3月停年退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。本学退官後、同8年3月まで摂南大学特任教授、同大学図書館長などを務められた。

先生は、構造材料の高温強度と衝撃強度に関する研究において顕著な業績を挙げられた。特に鋼のク

リーブ強度について種々の条件での変形と強度を明らかにし、クリープ機構の解明に貢献された。その後研究対象は高速変形に広がり、当時測定が困難とされていたひずみ速度数百/毎秒以上での材料の挙動を明らかにすることに成功されたほか、構造物の衝撃応答や波動現象に関しても業績を残された。また、これらの研究の指導を通じてこの分野で多くの人材を輩出された。学外においては文部省学術国際局学術審議会専門委員、日本学術会議航空宇宙工学研究連絡委員会委員、日本機械学会副会長、日本材料学会理事、日本航空宇宙学会理事、同関西支部長などの要職を歴任された。

これら一連の教育研究活動、学会活動により、平成18年4月29日瑞宝中綬賞に叙せられた。

(大学院工学研究科)

## 梅村 勲 名誉教授



梅村 勲先生は、8月19日逝去された。享年77歳。

先生は、昭和32年名古屋大学理学部を卒業、同37年名古屋大学大学院理学研究科博士課程を修了、日本学術振興会奨励研究生、名古屋大学理学部文部技官、同大学助手、京都大学基礎物理学研究所助手、同工学部講師、助教授を経て、平成3年教授に就任、原子核工学科同位体工学講座に所属し、同6年工学研究科教授に配置換えとなり、原子核工学専攻量子物質工学講座量子物理学分野に所属された。同7年停年により退官され、京都大学名誉教授

の称号を受けられた。

先生は、素粒子論の分野において優れた業績を残され、その発展に寄与された。特に、素粒子の相互作用とその模型に関する研究として、チャームクォークを含めたハドロンの4元模型の定式化をプサイ粒子の発見に先駆けて行い、チャーム中間子の諸性質を明らかにされた。さらに、素粒子の統一理論に関する研究も手がけられ、SU(7)模型など大統一理論について先駆的な成果を挙げられた。また、暖かい人柄で広い学識を持ち、量子力学など基礎物理の分野で教育と研究指導に尽力された。

(大学院工学研究科)

## 公開講座

## 玉城嘉十郎教授記念公開学術講演会(第47回)

日 時：11月18日(火)15:00~17:00  
場 所：京都大学理学部2号館第1講義室(1階120号室)  
内 容：主題 整数論と群のかかわり

演題 群の軌道と整数論

東北大学大学院理学研究科 教授 雪江 明彦 氏

遠アーベル幾何とは何かー整数論と群の新しいかかわり

京都大学数理解析研究所 教授 玉川安騎男 氏

受講料：無料

申し込み：不要

問合せ先：〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

京都大学理学研究科 総務掛

TEL：075-753-3600

FAX：075-753-3645

E-mail：somu@office.sci.kyoto-u.ac.jp

URL：http://www.sci.kyoto-u.ac.jp/modules/tinycontent4/index.php?id=8

## お知らせ

### シンポジウム「京都大学サービス・イノベーション国際シンポジウム」

1. 日 時：11月14日(金)10時00分～17時40分
2. 会 場：京都大学 百周年時計台記念館
3. 主 催：京都大学経営管理大学院  
共 催：大阪商工会議所  
後 援：日本経済新聞社, 京都商工会議所, (財)大阪市都市型産業振興センター  
京都大学グローバル COE プログラム「知識循環社会のための情報学教育研究拠点」
4. プログラム：
  - 10：00-10：10 ご挨拶 成生 達彦(京都大学 経営管理大学院 院長)
  - 10：10-10：30 京都大学「サービス価値創造マネジメント」教育プログラム紹介  
吉田 和男(京都大学経営管理大学院 教授 サービス・イノベーション取組責任者)
  - 10：30-12：00 基調講演「Open Services: Innovating Value in the 21st Century」  
ヘンリー・チェスブロウ氏(カリフォルニア大学バークレイ校 教授)
  - 12：00-13：30 休憩
  - 13：30-15：20 パネル討論Ⅰ：サービス価値創造の方法論  
パネリスト1：ジーネット・ブロンバーグ氏(IBM アルマーデン研究所サービス・プラクティス部門 マネージャー)  
パネリスト2：宮田 一雄氏(富士通株式会社経営執行役 兼 金融ソリューションビジネスグループ 副グループ長)  
コーディネータ：梶山泰生(京都大学経営管理大学院 准教授)
  - 15：20-15：40 休憩
  - 15：40-17：30 パネル討論Ⅱ：顧客接点とサービス価値創造  
パネリスト1：横山健一郎氏(ハイアット リージェンシー 京都 総支配人)  
パネリスト2：西村 明美氏(柊家旅館 女将)  
コーディネータ：日置弘一郎(京都大学経営管理大学院 教授)
  - 17：30-17：40 結語 原 良憲(京都大学経営管理大学院 教授)
  - 18：00-20：00 懇親会(会場：国際交流ホール)
5. 申込方法：サービス・イノベーションホームページ内  
(<http://www.si.gsm.kyoto-u.ac.jp/int/>)の【シンポジウム参加登録】にて、お申込ください。
6. 申込締切：10月31日(金)定員になり次第、締切らせていただきます。

7. 参加費：無料(事前申込制)
8. 問合せ先：京都大学経営管理大学院サービス・イノベーション事務担当  
TEL：075-753-3535  
E-mail：SI-info@gsm.kyoto-u.ac.jp

---

## 2008年度秋の自然観察会のお知らせ

1. 日時：11月15日(土) 10時～15時(受付開始9時30分 小雨決行)
2. 場所：フィールド科学教育研究センター 里域ステーション 上賀茂試験地  
(住所：京都市北区上賀茂本山2 叡山電鉄・京都精華大学前駅より徒歩10分)
3. 内容：自然観察、試験地で行われている研究についての説明、落ち葉や木の実を使った工作など
4. 定員：30名
5. 対象：一般の方々(ご家族での参加も歓迎いたします)  
※小学生以下の方が参加する場合は、保護者が必ず同伴してください。
6. 参加費：無料 (\*ただし、イベント保険料として50円徴収します。)  
持ち物：山歩きのできる(汚れてもいい)服装、歩きやすい靴、雨具、昼食
7. 申込方法：必要事項(氏名・年齢・性別・住所・電話番号)を明記の上、往復はがき・電子メールのいずれかの方法で申込んでください。申込み1通につき5名までの応募が可能です。(応募者全員の必要事項を必ず明記すること)  
※個人情報は当自然観察会の運営のみに使用いたします。
8. 申込締切：10月31日(金)当日消印有効  
申込みが定員を超えた場合は、抽選になります。結果は締切翌週にお知らせします。
9. 申込及び問合せ先：  
京都大学フィールド科学教育研究センター 里域ステーション 上賀茂試験地  
〒603-8047 京都市北区上賀茂本山2  
TEL：075-781-2404  
E-mail：kamigamo@kais.kyoto-u.ac.jp (件名：観察会参加申込み)  
ホームページ：http://fserc.kais.kyoto-u.ac.jp/kami

### ※注意事項

当日はイベント保険に加入致しますが、加入保険の範囲を超える賠償の責任は、場合によっては、保障できないこともあります。予めご了承ください。

## 第12回京都大学国際シンポジウム「変化する人種イメージ-表象から考える」

2002年に国際シンポジウム「人種概念の普遍性を問う」を開催しましたが、本シンポジウムは「概念」と表裏一体の関係にある「現実感」について考えます。人種概念が生物学的実体をもたず、社会的構築物にすぎないと了解されても、社会のあらゆる場面で人種を実感するのはなぜなのか-その課題にとりくむ鍵を、人種表象に求めます。

真実の歪曲として表象を論じるのではなく、さまざまなメディアや言説を通して人種の現実感を生み出す、表象の主體的役割に光を投げます。本シンポジウムでは、とくに人種表象の「変化」に着目します。人種表象が、社会状況の変動によりどのように動くのか-その変化のプロセスを考察するものです。変化する人種表象のさらなる可能性について、この分野を代表する海外研究者らとともに探りたいと考えています。

1. 日 時：12月5日(金) 13:30~17:30  
12月6日(土) 10:00~17:30
2. 場 所：時計台記念館百周年記念ホール
3. 参 加 費：無料 (申込み要：11月20日締切)  
申込方法等詳細については、ホームページをご覧ください。  
<http://kyodo.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~race/frame-symposium.html>
4. 連 絡 先：第12回京都大学国際シンポジウム「変化する人種イメージ」事務局  
〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学人文科学研究所気付 竹沢研究室  
FAX：075-753-6903 E-mail：hyosho@zinbun.kyoto-u.ac.jp
5. 主 催：京都大学  
企画・実施：人文科学研究所、国際交流推進機構  
協 力：京都大学オープンコースウェア、文学研究科、東南アジア研究所、生命科学研究科  
後 援：京都大学教育研究振興財団、日本学術会議、科学研究費基盤(A)「人種の表象と表現をめぐる融合研究」

---

## 無料法律相談のお知らせ

—11月実施分について申し込みを受付中—

法科大学院では、授業の一環として行う法律相談実務演習(リーガル・クリニック)において、無料法律相談を実施しております。

この無料法律相談は、日常生活の中で生じるさまざまな法律問題について、弁護士の立会いと指導のもと、既に法律知識を習得している法科大学院3年次の学生が市民の方々からのご相談に乗り、必要な助言を行うものです。(秘密は厳守いたします。)

現在、11月実施分について申し込みを受付中です。

(実施日)11月6日(木)、7日(金)、11日(火)、27日(木)

[問合せ先]

京都大学法科大学院 リーガル・クリニック担当

TEL：075-753-3262 FAX：075-753-3129(午前10時~午後5時/土日祝休)

詳細は法科大学院ホームページをご覧ください。

<http://lawschool.law.kyoto-u.ac.jp/kusunoki.html>

## 隔地施設 紹介



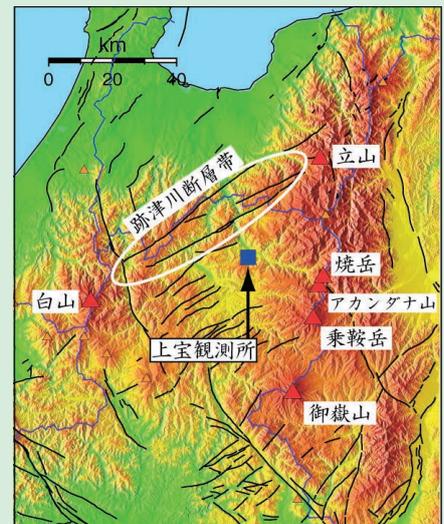
### 防災研究所附属地震予知研究センター上宝観測所 (<http://www.rcep.dpri.kyoto-u.ac.jp/main/obs/ktj/ktjJ.html>)

上宝観測所は、岐阜県飛騨地方の風光明媚な山間の町にあります。観測所から車で40分ほど走ると、北アルプスの登山基地のひとつである奥飛騨温泉郷にいたり、さらに峠を越えると長野県になります。日本屈指の山岳観光地である上高地は、観測所のある飛騨側から見ると奥飛騨温泉郷のすぐ向こう側になります。観測所の所在地は、平成17(2005)年2月以前は、岐阜県吉城郡上宝村という地名でしたが、その後の市町村合併により、東京都よりも広くなったといわれる岐阜県高山市の一部となりました。旧上宝村には、当観測所のほか、京都大学の遠隔地施設として、同じ防災研究所附属の流域災害研究センター穂高砂防観測所と、理学研究科の飛騨天文台の合計3施設が設置されており、それぞれの研究活動を行っています。

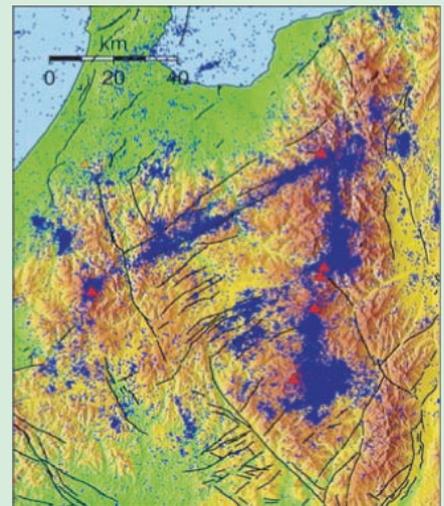
上宝観測所は、昭和40(1965)年に第1次地震予知研究計画に基づき防災研究所附属上宝地殻変動観測所として設置されました。発足当初の観測所には、上宝村本郷に観測所本館と光波測量用の観測ドームが、さらに本館から5kmほど離れた上宝村蔵柱に観測坑道が建設され、これらの施設による、地震予知研究に資するための地殻変動観測が開始されました。本館と観測ドームの敷地は旧上宝村からの寄附および購入によるもの、観測坑道の敷地は民有地を借用したものと、旧上宝村の関係者の全面的なバックアップによる発足でした。観測所をこの地に定めたのは、第1級の活断層である跡津川断層が近くに存在したことおよび旧上宝村からのご支援に加え、できるだけ海の影響を受けずに地殻変動観測を行うには、日本国内でも海からの距離が最も遠いこの地域が最適である、という考えもあったようです。その後、微小地震、全磁力、地電流、広帯域地震観測およびGPSなど観測項目を追加するとともに、岐阜県飛騨地方のみならず、富山県や石川県の能登地方などにも観測範囲を拡大し、広く中部地方中北部のデータの取得を行い、地震予知に関する基礎研究をはじめとする地球物理学的な諸研究を進めてきました。

平成2(1990)年には防災研究所附属地震予知研究センターに改組され、その際に、同センター上宝観測所となり、現在に至っています。

上宝観測所の観測対象地域には跡津川断層系などの活断層が多数存在し、多くの内陸地震が発生しています。跡津川断層では、ちょ



上宝観測所の位置と  
周辺の活断層、活火山の分布



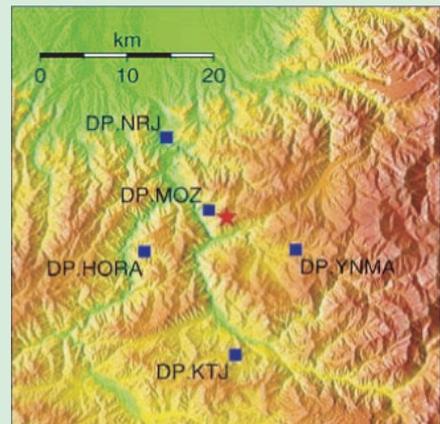
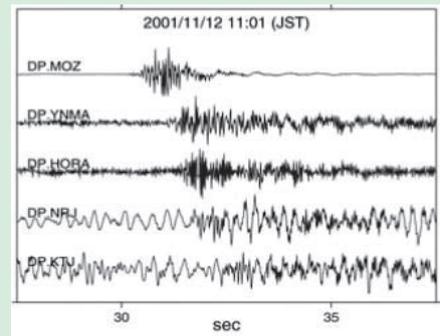
上宝観測所で震源を決定した1995年から2007年までの地震の分布。ひとつひとつの青い点が一個の地震を現す。跡津川断層の地震の線状分布や、飛騨山脈脊梁部の活発な地震活動が見て取れる。

うど150年前の安政5(1858)年に、飛越地震(M7.0)が発生し、飛驒地方(岐阜県)だけでなく越中地方(富山県)にまで大きな被害をもたらしました。飛驒地方の地震活動についての知識がほとんどなかった観測所の発足当初、開始したばかりの地震観測によって跡津川断層で微小地震が発生していることが発見されたことは、当時の特筆に値する研究成果でした。また、観測坑道を利用して、当時は光学記録が主流であった地殻の微小な変化の計測のための、電気的記録方式の開発が(尾池和夫前総長らによって)全国に先駆けて行われました。その後の観測によって、跡津川断層付近の地震活動や地下構造が詳細に調査されてきています。最近のGPS観測等によれば、新潟から神戸に至る地域に地殻の歪が集中した地域が帯状に分布しており、「新潟-神戸歪集中帯」と呼ばれています。跡津川断層は、この歪集中帯の中に位置し、地殻歪の集中・蓄積による内陸地震の発生過程の研究のためには絶好のフィールドであると考えられています。

また、飛驒山脈の脊梁部には、北から立山、焼岳、乗鞍などの活火山が並んでおり、さらに跡津川断層の西端には白山火山があります。これらのうち、観測所からも至近距離にある焼岳は、上高地のランドマークとして有名な火山ですが、大正池の生成等の活発な火山活動の記録があるにもかかわらず、昭和37(1962)年の小噴火を最後に40年以上の長期にわたり静穏な状態が続いており、防災上の見地からも注意深く見守る必要があると考えられています。焼岳では地下数kmの群発地震やそのさらに下30km付近の低周波地震なども観測されており、火山活動の研究のためにも好適なフィールドです。ちなみに、余談ですが、深田久弥の名著「日本百名山」の焼岳の項には、この山が「日本アルプスを通じて唯一の活火山である」という記述がありますが、現在は日本アルプス(飛驒、木曾、赤石の三山脈の総称)には、立山(弥陀ヶ原)、焼岳、赤棚(アカンダナ)山、乗鞍岳、御嶽山の5つの活火山が認定されています。

上宝観測所では、現在、十数点の微小地震観測点において短周期微小地震観測(主に、周期が1秒程度より短い地震波を観測)を実施し、データを収集しています。観測される地震は最も少ない日でも、1日あたり十数個以上はあります。これらのデータの一部は、リアルタイムで気象庁に分岐して、いわゆる「一元化処理」と呼ばれる、気象庁における全国の微小地震観測データの統合処理に供しています。さらに、逆に気象庁や防災科学技術研究所等、他機関のデータも収集し、独自の研究目的のための解析処理を行っています。

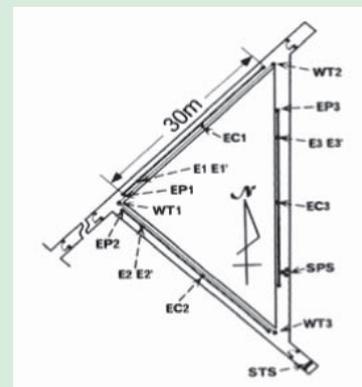
また、地殻変動のための観測坑道を複数箇所有しており、上宝観測室(高山市上宝町蔵柱)に加え、立山(富山県立山町)、宝立(石川県珠洲市宝立町)の計3観測室で伸縮計および傾斜計による地殻変動連続観測を実施し、公衆回線によるデータ収集を行っています。地殻変動の観測では、周期が分単位から月単位、さらには無限大(DC成分)までの地殻の歪みを、 $10^{-9}$ を超える精度で測定します。これは、



スーパーカムイオカンデの光センサー破損事故の際の記録。(上)周囲の地震観測点で記録された振動波形。(下)観測点の位置(■)と、上図の波形を解析して通常の震源決定手順で決められた、「事件」の発生位置(★)。



上宝観測室と観測坑道の入り口



上宝観測坑道の構造と機器設置状況。左端が坑道入口。Wで始まるのは水管傾斜計、Eで始まるのは伸縮計、Sで始まるのは地震計の各測定点。

たとえば傾斜変動を観測する場合、京都と上宝の間(距離約200km)に棒を渡して、片方の端が0.2mmほど昇降する変化をもう一方の端で検出する精度に相当します。

これらに加え、上宝、立山および宝立の3観測室では、短周期微小地震観測に加えて、世界中の大地震・中地震の記録が可能な広帯域地震観測(周期が120秒～360秒程度までの長周期の地震波も記録できる)も実施しているほか、跡津川断層の西端付近の西天生(飛騨市河合町)および宝立の2観測室では、プロトン磁力計による全磁力の観測を実施し、地磁気の変化に関する研究も行っています。

このようにして得られた観測データは、当地域の活断層や火山の活動を理解するための基礎的なデータとなっています。微小地震観測データを始めとするこれらの観測データは、昨今の通信インフラの整備により、観測所だけでなく、宇治キャンパス等でもリアルタイムで解析処理ができるようになりつつあります。(たとえば、学術情報メディアセンター KUINS ニュース54号 <http://www.kuins.kyoto-u.ac.jp/news/54/#kamitakara> 参照)。

一方で、40年を超える長期間の膨大な観測データの大部分は観測所にアーカイブされており、長期の時系列データの解析が重要である地震火山現象の研究のためには、観測所に籠ってデータの発掘を行う作業も欠かすことはできません。これらのデータを利用して、本学の教員・学生をはじめ、観測所近隣の富山大学、金沢大学および信州大学等の教員・学生、さらには全国の研究者が多くの研究成果を発信してきました。

観測データの収集・蓄積という、従前からの機能に加え、最近の観測所は全国の10を超える大学による合同観測のための基地としても重要な役割を果たしています。平成16(2004)年から平成20(2008)年まで実施中の「地震予知のための新たな観測研究計画(第2次)」(地震予知研究計画)では、まだ解明されていない内陸地震の発生機構の研究に資するために、跡津川断層歪集中帯の全国合同観測が行われています。この合同観測には、微小地震観測、GPS 稠密観測、電磁気観測等が含まれていますが、上宝観測所はそれらの前線基地として重要な役割を担っています。さらに、平成10(1998)年の飛騨山脈の群発地震のような地震の際には、地域の自治体へのデータ提供など地域の防災にも実際に役立ってきました。また、観測所の施設は各地の防災関係機関からの視察、小中高校などの児童生徒の見学などに利用されており、地域だけでなく全国的な科学研究・防災研究成果・知識の普及に貢献してきました。

今後は、中部地方中北部の広域的な地震活動や深部地殻構造、さらには飛騨山脈脊梁の火山活動等の地殻活動の研究を縦糸に、これらに基づく防災関連情報等での協力による地元への貢献を横糸にした活動を目指して行きたいと考えています。

#### 連絡先

〒506-1317 岐阜県高山市上宝町本郷2296-2  
TEL: 0578-86-2350 FAX: 0578-86-2858



奥飛騨温泉郷からみた活火山焼岳



観測所の創立40周年行事(2004年10月開催)の際のひとコマ。中央が尾池総長(当時)、向かって左から、和田博夫技術員(当時)、伊藤潔観測所長(当時)、梅田康弘地震予知研究センター長(当時)、三雲健名誉教授(第3代観測所長)、右端が和田安男技術員(当時)。

#### 職員構成

教員	5名(全員兼任)
非常勤職員	2名(現地勤務)

#### アクセス

- ・ JR高山線高山駅から、濃飛バス「見座公民館前行」に乗車、「本郷」にて下車、徒歩15分
- ・ 東海北陸道飛騨清見ICで中部縦貫道に乗り換え高山ICで降り、国道41号および県道76号経由で約1時間半